

平成 21 年 5 月 30 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730543
 研究課題名（和文） 現代美術における「市民」による制作活動の教育的意義と
 美術科教育の今日的使命
 研究課題名（英文） Educational Meaning of Production Activity in Modern Art by
 "Citizens" and Cotemporary Missions of Art Education
 研究代表者
 谷口 幹也（TANIGUCHI MIKIYA）
 九州女子大学・人間科学部・講師
 研究者番号：30335830

研究成果の概要：今日、日本各所で行なわれているアートイベント、アートプロジェクトは、今日の社会情勢、地域社会の現実に対抗するためにはじまっている。そして、社会が危機に瀕している現在、公教育は、地域共同体を維持する砦となり、真正面から希望を語り未来を託すための営みに従事できる場所となっていることが本研究をとおして明らかになった。以上のことから、多様な知と実践に出会い協働していくため場として現代美術を再認識し、市民社会への学校教諭の参画の推進、学校教諭の主体的な判断に基づく社会教育活動への参画を推進していくことが重要となる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	180,000	2,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：現代美術、教育、地域、市民

1. 研究開始当初の背景

現在、多文化主義といった視点から、民族、環境、人権といった現代のキーワードを軸に世界を読む力／世界の複雑な動きを批判的知性で認識できる力の育成／民族、環境、人権等をキーワードとした認識の枠組みを、身近な問題に適用して考えられる実践的な力が求められている。また、現代美術の場においては、社会参加型の芸術作品、プロジェクトが重要な位置を占めるよ

うになった。そして国内以上に、欧米諸国では、美術教育に関する社会的コンセンサスの形成と、獲得されるべき能力として批判的思考に関する教育カリキュラムが整備されている。多様な価値観が混在する多文化社会における美術教育上の課題は、市民社会における芸術行為の再考と、多くの組織、施設の連携による美術教育の実現によって、より充実すると考えられる。

日本の美術教育の現場においては、鑑賞教育の充実化が叫ばれ、グローバルな視点での芸術に関する教養の構築に向けての教育プログラム整備の遅れなどの問題があるように思われる。また、子どもたちのコミュニケーション能力の低下といった問題に、具体的な対応策が求められている。現在、教科の横断的な授業内容、及び授業形態が提案され実施されているが、本研究では、「芸術」教科の学校教育における可能性を模索し、学校教育と社会教育に連携に基づく学習プログラムの開発を目指している。今日的教育課題に対応する能力を有した教員の養成を進める上での問題点を抽出・分析し、それをもとに社会教育の場である美術館と、学校教育の現場の連携させる芸術教育コーディネーターの役割を、社会教育、学校教育の両面から観察し、その役割を明確にする必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、現代美術における参加型作品の美術教育的要素抽出のために作品の構造分析を行い、「見る」「聴く」「分かり合う」そして「行為する」ことを関連、共鳴させた表現活動、美術教育的要素の抽出し、参加型美術作品の構造の解明と美術教育的効果を目指す。そして、地域で展開されるアートプロジェクトに参画し、教育効果を上げている学校現場の研究調査を行い、図画工作・美術科担当教諭の聞き取り調査から、現状での課題を抽出し、地域社会で必要とされる美術教育コーディネーターの資質等について研究を行う。

本研究は、実践活動と活動現場の調査に基づく研究活動を通じて、市民社会における美術教育の役割の確認と回復という重要な課題と、今日の芸術・文化活動の中で美術教育が担うべき課題を包括的に考察しようとするものである。また、学校教育・社会教育の連携を視野においた研究を行い、今日の教師に寄せられる課題を、美術教育の視点から検討し、その具体的な対応策をアートプロジェクト、参加型美術作品の営為に見出し、現在、実施されている市民活動の検討及び、教師支援の為の観点の抽出を試みるものである。

3. 研究の方法

本研究の具体的な目的、研究方法は以下の三点である。

(1) 現代美術における「市民」による制作活動の教育的可能性の明確化

現代美術の制作現場における「市民」の制作活動への参画に着目して、その教育的意義の検討を行う。そこで今日の社会の課題に対応した、市民社会における美術教育の有り様を明らかにし、芸術文化活動の教育的可能性の明らかにする。

市民参加活動に関する具体的な調査対象は以下の通り。

- ・横浜トリエンナーレ 2005 (神奈川県)
- ・直島ベネッセ・アートサイト (香川県)
- ・金沢 21 世紀美術館 (石川県)
- ・福岡アジア美術館 (福岡県)
- ・前島アートセンター (沖縄県那覇市)
- ・ya-man' s café (群馬県前橋市)
- ・gallery soap (福岡県北九州市)
- ・北九州国際ビエンナーレ (福岡県)
- ・光州ビエンナーレ (大韓民国)

(2) 参加型美術作品の構造の解明と美術教育的効果の立証

現代美術における参加型作品の美術教育的要素抽出のために作品の構造分析を行い、「見る」「聴く」「分かり合う」そして「行為する」ことを関連、共鳴させた表現活動、美術教育的要素の抽出し、参加型美術作品の構造の解明と美術教育的効果を立証する。

具体的には、福岡県北九州市在住及び出身の現代美術作家、森山安英 (1936-)、白川昌生 (1948-)、宮川敬一 (1961-) の3名の聞き取り調査を行った。また講師を招聘し上記3名各自の作品、アクティビティに関する研究フォーラムを開催した。当該研究フォーラムに関して直接経費を使用してフォーラム報告集として書籍化を行った。

(3) アートプロジェクトと連携する学校教育の可能性の提示

地域で展開されるアートプロジェクトに参画し、教育効果を上げている学校現場の研究調査を行い、図画工作・美術科担当教諭の

聞き取り調査から、現状での課題を抽出し、地域社会で必要とされる美術教育コーディネーターの資質等について研究を行う。そして、アートプロジェクトと連携する学校教育の可能性を提示する。

具体的な聞き取り対象者は、筑波大学附属小学校・西村德行氏、現代美術作品展に関する鑑賞プログラムを実施している大阪市小学校教諭・内部恵子氏、横浜トリエンナーレ2005、2007にてキッズキュレーターを企画組織した横浜山手中華学校・王節子氏、埼玉県立近代美術館、田中晃氏である。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の三項目に整理することができる。

(1) 現代美術における「市民」による制作活動の教育的可能性

現代美術の作家の事例として、研究調査の対象とした宮川敬一、白川昌生、森山安英の作品、営為は、固定化された価値に揺さぶりをかけ、現在の矛盾を開示するといった共通点を持っていた。この社会、生活、思考の枠組みを問う現代美術の作品特性は、「市民」にとって、現在とは違う社会、生活、思考のフェーズを示すものである。グローバル化した世界は多くの対立を孕み、その混沌とした状況は市民生活に暗い影を落としている。人々の記憶、に着目し、消費されるモノではなく心に作用するコトをつくりだす現代美術の作品形態、また“運動体”を組織するその作品特性は、今日、越境教育学的な意味においてよりその重要性を増している。

(2) 参加型美術作品の構造と美術科教育

中学校、高等学校の美術科の教育活動においては、「社会との関わり」「批判的思考に基づく制作活動」「協働、コミュニケーション関係性の創出」といった参加型美術作品の特性に着目する必要がある。これら参加型美術作品の特性を重視し創造的に人格を陶冶する「美術科」の教科特性の再定義することが、現在、最重要の課題であると指摘することが

できる。「より良く生きるための知恵」をつくりだす技法＝アートを学ぶ教科として「美術」を再定義し、単元開発、授業研究を推進する必要性が明らかになった。

(3) アートプロジェクトと連携する学校教育の可能性

社会が危機に瀕している現在、公教育は、地域共同体を維持する砦となり、真正面から希望を語り未来を託すための営みに従事できる場所となる。そして今日、各所で行なわれているアートイベント、アートプロジェクトは、今日の社会情勢、地域社会の現実に対抗するためにはじまっている。以上のことから、多様な知と実践に出会い協働していくため場として現代美術を再認識し、市民社会への学校教諭の参画の推進、学校教諭の主体的な判断に基づく社会教育活動への参画を推進していくことが最重要であると結論づけられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

① 谷口幹也、「「子どもの時間」から「アートの時間」へー「私」と「世界」を編みなおす美術教育実践への道ー」、財団法人 美育文化協会『美育文化』2007年5月号、24頁-29頁、2007年、査読無

② 谷口幹也、「鑑賞教育は、子どもたちに何を保障するのか?」、財団法人 美育文化協会『美育文化』2008年11月号、24頁-29頁、2008年、査読無

[学会発表] (計 2件)

① 谷口幹也、相田隆司、「「ひらく」「おこす」「であう」ー連動するアート教育のダイナミズムー」、美術科教育学会、群馬大学、2008年3月

② 谷口幹也、「thinking on the borderland : 拡張するアート、越境する学びの共同体をめ

ぐって」、美術科教育学会、佐賀大学、2009
年3月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 幹也 (TANIGUCHI MIKIYA)
九州女子大学・人間科学部・講師
研究者番号：30335830